

|         |                        |         |        |
|---------|------------------------|---------|--------|
| 氏名(本籍)  | まつばら たつや (岐阜県)         |         |        |
| 学位の種類   | 博士(心理学)                |         |        |
| 学位記番号   | 博乙第2458号               |         |        |
| 学位授与年月日 | 平成21年10月31日            |         |        |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当           |         |        |
| 審査研究科   | 人間総合科学研究科              |         |        |
| 学位論文題目  | 生活分析的カウンセリング法の開発に関する研究 |         |        |
| 主査      | 筑波大学教授                 | 教育学博士   | 新井 邦二郎 |
| 副査      | 筑波大学教授                 | 医学博士    | 小川 俊樹  |
| 副査      | 筑波大学教授                 | 教育学博士   | 徳田 克己  |
| 副査      | 筑波大学教授                 | 博士(心理学) | 吉田 富二雄 |

## 論文の内容の要旨

### (目的)

本論文は、本業に対して無気力・無意欲的な高校生・大学生・大学院生などに対して、意欲的な生活を取り戻し、新たな生活目標を掲げて目標を達成できるように援助するために著者が開発した「生活分析的カウンセリング法 (Life Analytic Counseling Method: 略称 LAC (ラック) 法)」の開発と発展に関する研究である。

無気力になる引き金は、入学時や専門選択時の挫折・妥協、卒論・修論での失敗、新しい科目へのつまずき、五月病などがあげられる。無気力状態になった学生のことは、特に「スチューデントアパシー」と呼ばれるが、別名「意欲減退症候群」、「学生無気力症」、「意欲減退学生」などとも称されている。

研究の初期には、スチューデントアパシーの大学生を対象にして、事例研究を積み重ね、方法論を構築した。そして、LAC法の適応を発展拡大して、中学生、高校生、大学生、大学院生、留学生、社会人を対象に研究し、無気力から意欲へと行動変容する方法の研究を行った。

### (方法)

本論文は、文献研究と事例研究法を採用した。

論文の第1部では、文献研究によりスチューデントアパシーについて、内外の研究をまとめた。アパシーは、「無感動」・「無関心」などと訳される。スチューデントアパシーとは、通常「無気力な学生」の示す症状について用いられる用語である。具体的には、真面目な学生が、ある時期から急に授業に出席しなくなり、全く勉強する意欲を無くしてしまうような状態になることをいう。一見すると、“さぼり”や“怠け”と間違われやすい。卒業希望はあるが、本業である自分の専門分野について勉学を放棄し、本業以外のアルバイトやサークル活動に代償として打ち込む事例も多々見られる。いわゆる選択的退却である。

論文の第2部から第5部までは、著者が筑波大学の開設以来、保健管理センター学生相談室専任相談員として20年間勤務してきた中で、開発したLAC法の事例研究である。当初、「行動分析的カウンセリング法 (Behavior Analytic Counseling 法: 略称 BAC 法)」を試行開発したが、BAC法を修正し、洗練させてLAC法を開発するに至ったのである。

LAC法で使用される材料として、①個別青ラベル、②グループ別赤ラベル、③生活行動分析図 (LAC用紙)、

④見本例、⑤生活行動分析日程図、⑥人生線（Life Line）などを考案し、作成した。また、その手続きとして、次のような10段階の過程を経ることを確立した。

- 第1段階 現在やるべきことをラベルに列記する
- 第2段階 グループ別に分類する
- 第3段階 グループに名前をつける
- 第4段階 必要性・可能性から配点する
- 第5段階 得点の高い順に配列し、生活行動分析計画図（LAC図）を作成する
- 第6段階 最重点目標を2項目ぐらい選ぶ
- 第7段階 最重点目標の生活行動分析日程図（表）を作成する
- 第8段階 1ヶ月ごとに行動を評価する
- 第9段階 新LAC図を作成する

#### （結果、考察）

26の事例研究の結果、LAC法は学内・外のサークル活動に熱中し学業怠慢になった学生、アルバイトなどの副業にはまり学業を回避する学生、家族の死や失恋などで無気力になった学生などにカウンセリング効果が見られ、さらに中学生や留学生にも効果が得られた。これらのことにより、LAC法は学業回避、無気力になった生徒・学生の改善に広く有効なカウンセリング法であると考えられる。

### 審 査 の 結 果 の 賢 旨

本論文のLAC法は、さまざまな出来事をきっかけとして、生徒・学生にとって本業である学業や就職活動などに対し無気力的になったり回避的になったりしている者に対し、自分の足もとを再確認し生活を徐々に立て直すなかで、気力を回復させ、本業に復帰させる方法として開発され、またこのLAC法は現在、著者以外の人たちによっても使用されるようになっている。その点で、LAC法の開発は独創的な研究と言える。また、本論文は、著者の30年以上にわたるLAC法のライフ・ワークを集大成したものであり、大きな評価に値するのと言える。

ただし、LAC法が表面的、一時的に学業回避・無気力になっていて、本人の中にまだ気力の根が残っている生徒や学生には効果をもつと考えられるが、長期の不登校生徒やNEET、そして引きこもり青年などの深刻な無気力などに、どれほどのカウンセリング効果を持つのか、今後の研究の発展が期待される。

著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。